

現代性の環境

情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] の学生有志による芸術実践を中心に紹介する展覧会

会期 2026.03.07-04.12

(前半: 3月7日(土)～3月23日(月)、後半: 3月27(金)～4月12日(日))

出展 前半: florian gadenne + miki okubo、吉本梓、大橋美月、
テクノロジーの〈解釈学〉メンバー有志(石井飛鳥、片倉洗一、高玄燁)
後半: 兒島朋笑、河合将也、中岡孝太、中村駿、ふじかおる

企画担当 大久保美紀

主催 情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]

協力 art-sensibilisation

会場 The Terminal KYOTO (〒600-8445 京都市下京区新町通仏光寺下ル岩戸山町424番地)

関連イベント

「現代性の環境」をめぐるディスカッション

日時 3月28日(土) 14:00-16:00

会場 The Terminal KYOTO 2F

登壇 秋庭史典(名古屋大学)、三輪眞弘(IAMAS 名誉教授・京都芸術大学)、
吉岡洋(京都芸術大学)、大久保美紀(IAMAS)

Website : <https://www.iamas.ac.jp/gendai/>

お問合せ先 : 大久保美紀 / [mk_\(@\)iamas.ac.jp](mailto:mk_(@)iamas.ac.jp)



展覧会概要

「現代性の環境」は、科学的知性と芸術的感性の融合を建学の理念に、メディア表現の先駆的研究を行う情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] の学生有志による芸術実践を中心に紹介する展覧会です。現代社会を生きる私たち、とりわけ若い世代が直面する切実かつ避けがたい問いに、メディア表現を探究する多様な視座から向き合います。

高度に発達したメディア環境は、利便性や効率性をもたらす一方、価値観や感覚の同質化を加速させ、個々の知覚や思考のあり方に強い圧力を及ぼしています。こうした状況において、芸術的実践は、その同質化に抗する批判性や、別様のリアリティを構想する力を獲得しうるのでしょうか。リアリティを揺るがす技術的条件、人工知能に象徴される知覚や判断の再編成、身体とテクノロジーの関係性の変容——それらを前に、メディアを介した創作はいかにあるべきかという問いが、あらためて浮上しています。さらに、エコロジーの問題は、自然環境のみならず、主体・社会・人工物・テクノロジーを含む存在論的な射程へと拡張されつつあります。惑星規模のオイコノミアのなかで、芸術表現は、環境とともに生きる思考の枠組みをいかに問い返すことができるのでしょうか。

「現代性の環境」は、私たち自身の実践によって問い直され、更新され続けます。本展は、その環境に対して、芸術がどのように関与しうるのかを、現在進行形の問いとして提示します。

出展作家 作品解説

●florian gadenne + miki okubo

IAMAS 教員の久保美紀と美術家のフロリアン・ガデンによるユニット。清流の国ぎふ芸術祭 Art Award IN THE CUBE 2023 入選 (2023)、第 10 回 500m 美術館賞グランプリ (2023) など。私たちが在る世界と関係を結びなおす芸術実践を行う。

《Le Chêne Monde》(オークの世界、2020)には、一本の樹木が抱え得る複雑な生態系が繊細なテクニックで描かれている。オーク [仏:chêne] はカシ・カシワ・ナラなどを含むコナラ属の総称で、樹木の中でも最も多くの種を育む。木の枝には虫や鳥や地衣類、地面には異なる動植物が、根の部分には菌類が鬱蒼とし、四季の変化を表す。共生、対立、寄生、捕食・被食という生物種間の複雑な関係性とエネルギーのサイクルを可視化することによって、生のネットワークを明らかにする。2019年に始まった《Le Chêne Monde》をめぐる研究は、著書『L'Arbre-Monde』(Belin、2024)として結実した。

《Gland Monde》(2025)は磁土製のドングリ群と多様な形態を持つドングリのデッサンから成る。ドングリは、広くはブナ科の樹木の果実、狭くはコナラ科の樹木の果実と定義される。都市や森で採取した木の実を型取り、施釉焼成し、磁土製の木の実を得た。ギリシャ語で模倣を意味する「ミメーシス」[μίμησις]は、人間が身体動作を通じて対象を「うつす」行為であり、近代より前の時代の芸術行為の本質である。手を動かして対象を写しとることは事物の理解や対象への共感にかかわる。小さな木の実の一つひとつは樹木の生命の「技術」の現れである。本展では、模写を通じて一つのドングリと絆を結ぶ (apprivoiser) 参加型作品として展示する。

《oromitose》(2021)

パンゲア (pangé) はギリシャ語の「すべて」(pan) と「ガイア」(Gaïa=大地、地球)を意味する。20世紀はじめ、大陸移動説を提唱した気象学者アルフレート・ヴェーゲナーは、地球の大陸が海で隔たれる以前、ただひとつの大陸があったという仮説を唱えた。古代のパンゲア大陸の存在に着想を受け、それらが少しずつ移動して現在の世界の土台となるように、細胞分裂における核の様子が重ね合わされている。

《Quercus》-春・夏・秋・冬(2023)

フランシス・マルタンとフロリアン・ガデンによる共著『L'Arbre-Monde』(2024)の挿絵として制作された。四季をめぐる生命のメタモルフォーゼを、一本の樹木に着目して表現した。

●吉本梓 YOSHIMOTO Azusa

IAMAS25期生。沖縄にて自生植物の利用や民具制作の調査を継続してきた。現在は、縄を綯うという身体的・反復的行為に着目し、植物との関係性から「自然とは何か」を問い直す芸術実践を行っている。

《軌道上のイネ》(2025)

人類が農耕を始めたから、人は自然を支配し始めたのか、それとも植物に導かれ共に変化したのか。本作は一粒の稲からその関係を見つめ直す。日本では「一粒に七つの神が宿る」とされ、稲は精神文化とも深く結びついてきた。作品では、19世紀末から試みられてきた電気栽培技術を用い、微弱な電流や磁場が稲に作用する様子を可視化する。科学と信仰、自然と技術の境界が揺らぐなか、私たちが失いつつある“自然との対話”をもう一度感じ取るための試みである。

《地から立つ大縄》(2026)

本作は、縄綯(なわな)いに焦点をあて、河川に自生する植物を採取し編む身体行為の中で繰り広げられる植物との物理的、心理的な反復的接触を感覚的に可視化する試みである。縄の径は巨樹(環境省の定義により地上1.3mの高さで幹回りが3m以上)に掛かる縄を想像した。

《月桃のしめ飾り》（2021-2025）

沖縄在住時より、沖縄の自生植物である月桃でしめ飾りを作ってきた。正月に年神を迎え入れる神聖な場所（結界）を表す。しめ飾りは毎年一種制作され、本展では五年間かけて制作された五つの作品を展示する。

●大橋美月 OHASHI Mizuki

2001年生まれ。IAMAS24期生。ミルクの膜をマテリアルとして用い、身体と環境の関係性や生命観について探究する。

《Milk Skin》（2026年）

私たちが食品として摂取しているミルクは牧場で生産され、工場で脂肪分や栄養素などが加工され、殺菌や均質化といった工程を経て市場へ流通している。ミルクは哺乳類の子の内界から外界への移行を橋渡しする。ミルクの起源は、卵の殻にカルシウムを供給する皮膚の分泌物にまで遡り、哺乳動物のみならず多種間における生の連続性にかかわっている。ミルクの膜はタンパク質の熱変性により、脂肪球を包み込むことで生成される。工業的なミルクから立ち上がる生々しいテクスチャーのミルクの膜は、閉ざされた都市の身体を生態系（エコシステム）の問いへと開く。膜は存在論的境界を再考し、原初的で懐古的に世界を再び知覚する。本展では、乳脂肪分と殺菌温度の観点から、異なる五つのミルク膜についての研究を展示する。

IAMAS プロジェクト「テクノロジーの〈解釈学〉」メンバー有志

●石井飛鳥 ISHII Asuka

2001年、札幌市生まれ。慶應義塾大学 SFC を卒業後、IAMAS25期生。現代のメディア環境における「一人」の再定義を行うために、AI やソーシャルメディアを用いた制作と、実験心理学の手法を用いた認知の分析をする。

●片倉洸一 KATAKURA Koichi

神奈川県藤沢市生まれ。IAMAS25期生。プログラマーとしてインタラクティブコンテンツ開発に従事しながら、モジュラーシンセや Max を用いた幽明怪奇な音響表現を行う。現在は、時間哲学を中心としたリズム概念の研究をしている。

●高玄燁 KOU Gennyou

中国上海生まれ。上海工程技術大学を卒業後、IAMAS25期生。社会の中で未完了経験を新たな「廃墟構造」として捉えている。複数媒介を組み合わせによって廃墟的な経験を再現し、テクノロジーが感覚を形づくる仕組みを探究している。

三原聡一郎《空気の研究 / Study of Air》（2026年に再制作）

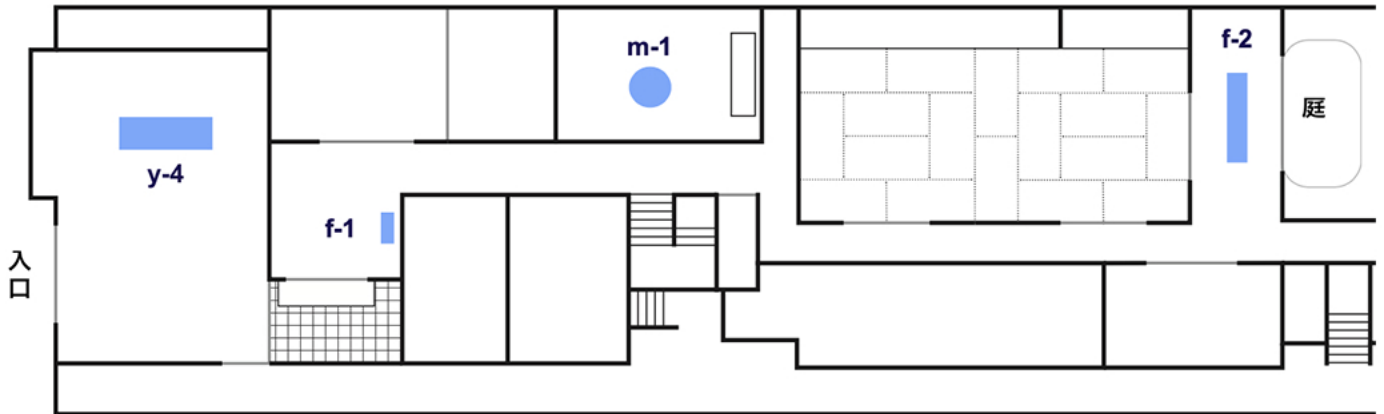
三原聡一郎は、IAMAS 卒業生で、メディアアートの基盤となる民主化されたテクノロジーの視点・方法論から、開かれた系のあり方を探り、装置としての芸術を探究する。2024年の展覧会「三原聡一郎 レシピ：空気の芸術」では、レシピの概念を参照し、作品のメカニズム詳細を記載したレシピを公開した。芸術実践における循環や還元性についての作家の問いを引き受け、IAMAS プロジェクト「テクノロジーの〈解釈学〉」メンバー有志が《空気の研究 / Study of Air》を再制作する。



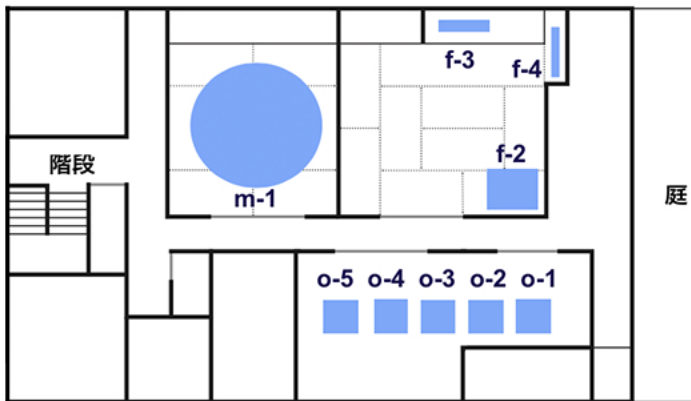
ひらひらと移ろう浮遊体の動きは、目に見えない気流の変化によるものだ。気配や存在感と関連付けられる超低周波の空気振動（聞こえない音）を数値化する為に小型マイクを応用したシンプルなセンサシステムを設計し、屋外に設置されたセンサはこの地の風のデータを常に計測する。その情報に基づき床上のファンはリアルタイムで出力を制御されている。風を捉え、再構成する一連のシステムは日本における空気と呼ばれる概念について実践的考察を目的としている。（作家ウェブサイトより引用）

会場図 作品リスト

1F



2F



florian gadenne + miki okubo

f-1 《oromitose》(2021)、キャンバスにアクリル、φ400

f-2 《Gland Monde》(2025)、磁土・デッサン、可変

f-3 《Le Chêne Monde》(2020)、紙に墨・水彩・ガッシュ、
121.8×90.0cm

f-4 《Quercus》-春・夏・秋・冬(2023)、紙に墨・水彩・ガッシュ、
168×237mm

吉本梓

y-1 《月桃のしめ飾り》(2021-2025)、月桃、20×20cm

※会場の五つの異なる空間に展示

y-2 《地から立つ大縄》(2026)、河川敷の自生植物・土・プロジェクター、H100 × W180 × D180 cm

y-3 《軌道上のイネ》(2025)、イネ科植物・水槽・川の水・スズメッキ銅線・LED・霧発生機、H100 × W100 × D200 cm

y-4 《習作》(2025)、イネ科植物、ほか

大橋美月

o-1 《Milk Skin》(2026)、ロングライフ乳、乳脂肪分3.5%以上、殺菌140°C・2秒間

o-2 《Milk Skin》(2026)、無脂肪乳、乳脂肪分0.1%、殺菌130°C・2秒間

o-3 《Milk Skin》(2026)、濃縮乳、乳脂肪分4.4% 殺菌130°C・2秒間

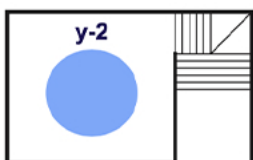
o-4 《Milk Skin》(2026)、低脂肪乳、乳脂肪分1% 殺菌135°C・2秒間

o-5 《Milk Skin》(2026)、低温殺菌乳、乳脂肪分3.6%以上 殺菌66°C・30分間

三原聡一郎

m-1 《空気の研究 / Study of Air》(2026年に再制作テクノロジーの〈解釈学〉メンバー有志

石井飛鳥・片倉洗一・高玄燁による再制作)、マイク・フィルタ回路・マイクロチップ・DCファン



B1

